

芥川だより

編集発行人下村嘉明

発行所着物から服を仕立てます

高槻市芥川町2-14-3

TEL072-681-8870

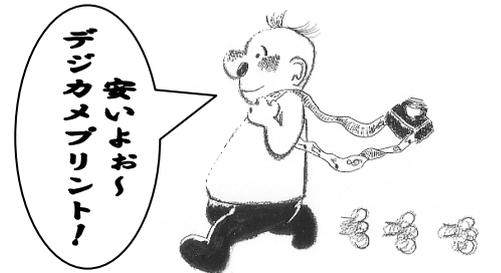
梵

発行日/2007年6月20日

ご希望の方にはお送りします

お気軽にお問い合わせ下さい。

e-mail:akutagawa_dayori@yahoo.co.jp



芥川の写真屋さん

一年を振り返って

「芥川だより」を創刊してから一年がたちました。ひとえに投稿していただいた方々や読者のご支援に支えられて、つづけることができました。深く感謝申し上げます。◆当初のきっかけは、真糞さんとの何気ない会話の中から浮かんだ思いつきでした。創刊するにあたって、堅苦しい編集方針などはなく、投稿していただいた記事を通して、普通の人々が日々の生活のなかで出遭う面白み、可笑しみ、哀しみを共感できればいい、そんなふう考えたのです。◆まったくの素人ですから、はじめは手探りです。まず自分でいくつかの原稿を書き、投稿を呼びかけ、創刊に向けて動きはじめました。すると、コンピュータで紙面を作成してくれる人、挿絵を描いてくれる人、原稿を書いてくれる人が集まってきました。そして号を重ねるにしたがって、連載を引き受けてくれる人、紙面全体

の校正をしてくれる人……、そんなふう輪が広がっていったのです。ささやかなミニコミ紙ですが、発刊するごとにいろいろな人との出会いがあり、発見があります。私はそれが楽しくて仕方ありません。一年つづけてきて何よりうれしいのは、読者の方から励ましの便りをいただいたり、店先で声をかけていただくことです。◆毎月半ばごろから紙面の編集をはじめ、20日頃には発送します。発送し終わるとすぐに、次号が気になりはじめます。紙面を埋めるだけの記事が集まるだろうかという心配がいつもありますので、日ごろから、ネタを探しては原稿を書き、投稿をお願いします。◆目標は24号——。「これから一年がしんどいよ」と挿絵のHさんは忠告します。しんどくても、みなさんのご支援が後押ししてくれるでしょう。楽しみながら、一号一号つくっていかうと思っています。

祝 一周年



芥川商店街歳時記

今月の予定

- 中元大売出し 6月30日(土)~7月8日(日) ガラガラ抽選 現金総当り
- 青空ライブ 7月8日(日) 商店街 アーティスト多数出演
- 夜市 7月28日(土) 恒例の芥川商店街の名物祭事 高槻まつり 8月5~6日
- 楽の会 亀屋寄席 7月8日(日曜日)桂 宗助&旭堂 南陽 午前10時半開場 会費2500円

深奥幽玄手談の交わり

囲碁で豊かな人生を!

日本棋院高槻支部

芥川囲碁サロン

(株)入谷商会経営

日本棋院棋士谷村義行八段による
大盤解説毎月第二日曜日午後2:30より
指導碁毎月第二日曜日午後4:00より

高槻市芥川町2-10-11(芥川商店街)

TEL・FAX 072-682-0403(代)

私はいろんな本を読む。垢抜けない本も、気分がすっきりするのも、でも読む。

よい言葉はメモをしておく。

「理屈じゃなか！」という言葉を見出した。私が、これを読んだころは若かった。そして、自分の人生の中で理屈が重きをなしていた時代であった。しかし、何十年とたった今、つらつら思うに、いろんな場面で「理屈じゃなか」と心の中で叫ぶことが多くなった。ただで年をとっていいせいだろう。

世の中で、子供はきらい、老人がイヤ、私はこれらの言葉を、たとえ本心がそうであっても、口に出すべきではない。なぜなら、いやしくも人間である。最も保護を必要とし、自分もその老人の立場になったから身にしみる。人間誰しも心に何を思おうと、画こうと自由である。「言う」ということは、それには責任がついてまわることも忘れてはならない。

口は禍いのもとともいう。おっと理屈じゃないのに、理屈っぽくなってしまった。

本当は不快さを感じる。そして人生には「言わぬが花」ということだってあるもん。だまって損することもあつよ。

わいわいガヤガヤ書いてみたら、すっきりした。

笹ユリの花

今日は、また雨、京丹波稲次へ向かって車が走る。車中降りしきる景色に目を移しながら、気持ち是我が故郷へ帰ってゆくように、浮きだつていた。あまりにも、よく似た田園風景、それにそうように建つ家並び、目的地に着いて、坂道をのぼってゆく。ああ、あそこに百合が咲いている、でも大分上の方だよ、大丈夫かいな、すべるなよ、と、はげまし、声をかけ合いながらのぼってゆく。

やれやれ、百合の側までついた。プンと何ともいぬぬよい香り、足元にはいろんな雑草と共に、薬草がある。手を差しのべないで居られない。うつぽ草、どくだみ、みこしぐさ、ほたる袋、どれもこれも、そこへ露がぎっしり、じゆうたんをしたようにある。

雨は、ようしやなく私達にたたきつけるように降る。百合は手の届かぬ高嶺の花。

我にかえった時は、びしょぬれ、そして、他人さんの家のお座敷に坐っている私達の姿。家人のかざり気のない親切、心をよせ合つてつくつて下さった、くりあん入りだんご、えんどう豆のあんこだんご、とつても表現出来ない程のご馳走の種々には参つた。

「ありがとうございました」

感激の声をあげながら、夢中で頂いてしまった。名残つきない皆さんの暖かい心に感謝しながら別れをつける。

梅雨空に ゆかしくにおう

百合の花

やまぶきの つめあとくろく

佃煮が



白髪

鏡にむかつて髪をすいていて、あつと思つた。白髪だ、ああ、私も年をとつたんだなあ。何十年前の話。十二月六日に〇〇才の誕生日をむかえる。

私もあの頃の母と同じ年齢になつたんだなあと思う。少女時代、母の髪の毛を抜くのは、私の仕事だった。美しい黒毛から時折白いのがあつた。すぐく母は気にして、一本につき何銭かもらつた。

長い間パーマをかけるのはイヤといつてセミ日本髪風に結つて学校参観に来てくれた。友達から「美しいお母さんねえ」。母は「私もうれしかったヨ」と。

髪は女の命であると、髪を大切にしたい。パーマはかけなかつた。その母がパーマをかけるようになった。いつの頃は忘れてしまつたけれど、白髪抜きはしなくていい、いちいち抜いていると髪が薄くなつてしまうからという。それで私は失業。白髪抜き料、一本何銭かのアルバイト料はなくなつてしまった。

その後しばらくの間、白髪がふえるままにまかせていたが、ある時黒い染料を買つてきて染めだした。染めるのは髪が長いとむずかしく、それで、髪を切つて、パーマをかけてきた。身だしなみのよい人だった。

私が結婚して、たまに実家へ帰ると、白髪を美しくカットしてもらつて、しよんぼりすわつている。私の顔を見るなり、嬉しそうに「若くなつたやろ」と笑つた。

元気で身だしなみのよかつた母に生気がない。いや、年だ。みんなこんなになるんだ。自分で出来ることは何でもこなしていた人、「何もしなくていい。おとなしくいりゃいいさ」。その言葉が今でも耳についてはなれない。そんな私にも、母と同じ「老い」がしのびよつてきた。母の生きた年齢には、まだ十年はある。鏡の中の白髪を見て、まだまだ、しっかりしなければと思う。

大雪山縦走 (三)

梵店主

身体の芯まで凍りつきそうな寒さは、
 剣岳で経験した以上の山の厳しさを予感
 させた。ますますつのる不安は、割れた
 テルモスにも不吉な予兆を感じさせる。

雪山には死に直結する危険が潜んでい
 る。それは予想を超えたかたちで突然あ
 らわれる。昨年、一人の先輩が穂高で命
 を落とした。二年前にヒマラヤ登山で活
 躍し、世界最年少で八千メートルに達し
 た人である。山岳部の将来を担うはずの
 期待の星であった。そんな先輩が少しの
 油断で墜死したのだ。

昭和の初めに山岳部が創立されてから
 今日にいたるまで、部の歴史にはいくつ
 もの墓標が刻まれている。落石にあたっ
 て即死した人もいれば、七十年に一度と
 いう大雪崩でテントごと押しつぶされた
 人もいる。行方不明になって、五十年経
 ったいまも遺骨が発見されない先輩もい
 る。登山にはいつも死の影が尾を引いて
 いるのだ。

よっちゃんは、まだ経験は浅いが、山
 登りが楽しいと感じたことは一度もな
 い。苦しいだけである。ヒマラヤ経験の
 ある先輩も同じ感慨を漏らしていた。山
 岳部の山登りは苦行なんだろうか、死を
 も已むなしと受け容れる荒行なんだろう

か、とよっちゃんは思う。その先輩はこ
 んなことでもいった。「危険に直面したと
 き、たとえ引き返すことが賢明であつて
 も、立ち向かわなきゃならん。愚かだと
 いわれてもね。引き返えしたら、もつと
 もらしい弁明をどんなにあげたらつて
 も、悔恨と屈辱感からは解放されないだ
 ろうな。新しい未知の世界を拓くとい
 うのはそんなことだと思ふ。危険にぶつ
 かって乗りこえる以外ないんだよ」と。苦
 行の鍵はそんなところにあるのかな、と
 よっちゃんは思った。

出発前、よっちゃんは十勝三俣駅で親
 に宛てて葉書を書いた。「いま北海道の
 ど真ん中にいます……」と書きはじめた
 よっちゃんは、かじかむ手を太ももの間
 や脇の下にはさんで温め、足踏みをしな
 がら、つぎにつづく言葉を考える。「こ
 れから山に入って、三月の終わりに
 は京都に戻る予定……」、最後に「心配
 はいらない」と結んだ。入山前に親に使
 用したののは、後にも先にもこのとき
 だけだ。

行けるところまでトラックで送って
 やるというよろず屋の好意に甘える。ト
 ラックの荷台にザック、スキーを積み
 その上にしゃがみこむ。走り出すと、前
 方から受ける冷気は寒いというより痛
 い。鋭い針となってヤッケ越しに肌に刺
 さるようだ。除雪されていない林道を一
 ○分ほど進むと、雪道になれているよろ

ず屋でも「帰れなくなったら困るから、
 ここまでだ」という。一〇分といえども、
 五〇キロの荷を背負って雪の中を歩く
 ことを思えば、よっちゃんにはたいへん
 ありがたかった。

京都を発つて五日、ようやく石狩岳の
 麓にたどり着いた。北海道の山は懐が深
 い。それは魅力でもあるが、一度山に入
 れば逃げ道はないということだ。どんな
 に短いコースでも人里まで三、四日はか
 かる。怪我をしたり病気になるっても、救
 助の期待はできない。

いまは穏やかな表情を見せる山々も、
 咆哮を上げて荒れくるうこともあるだ
 ろう。そんなときは、地中深く冬眠する
 熊のように雪の中でじっと耐え忍ぶし
 かない。烈風に頬を打たれながら、戦闘
 的に山に立ち向かわなければならぬ
 ときもある。前途には、予想を超える
 危険が待ち受けているかもしれない。二
 人の先輩も、口には出さないが、「やば
 い山行になるかも……」と心の中では思
 っているにちがいない。

気温は低く氷点下一〇度以下だが、風
 もなく晴れあがっている。出発前の静か
 なひととき、目の前にそびえる石狩岳を
 見あげながら、リーダーのS太はタバコ
 に火をつけた。それに誘われるように、
 よっちゃんもハイライトを一本くわえ
 る。S太は、身体の大きいよっちゃんか
 らは見おろすほど小柄だが、安定した

体力には定評がある。一步引いて冷静に
 山を見、沈着に行動する。さまざま試
 練が立ちほだかるであろうが、簡単には
 引き下がらないだろう。そのねちっこさ
 がS太の持ち味だ。タバコをくゆらせな
 がら、登るルートを読んでいる。

そろそろ出発の時刻だろう、よっちゃん
 は胸一杯に吸いこんだタバコの煙を
 ゆっくりはきながら「やるぞ」とつぶや
 いて、思いのたけの力を臍下丹田に込め
 た。次の瞬間、
 「よっしゃ、行こか」

S太から、春山合宿開始の合図が発せ
 られた。スキーを履き、キスリングを担
 ぐ。先頭を行くのは、剣合宿のときと同
 じM蔵だ。次によっちゃん、しんがり
 はS太である。この歩く順序は最後まで変
 わらない。

M蔵は激しく動的だ。山の勘は鋭い。
 その勘を働かせて、大雪山にルートをき
 り拓いていくだろう。そのうえ、ずば抜
 けた登はん技術をもつ。不器用なよっ
 ちゃんは足元にもおよばない。だが、よっ
 ちゃんには一つだけ自信があった。体力

だ。剣合宿で自信をつけた体力だ。これ
 だけはS太にもM蔵にも負けない。
 石狩岳に向けて第一歩を踏み出した
 とき、京都からずっとよっちゃんを包み
 こんでいたあの重苦しい不安は、幻のよ
 うに消えていた。

ルーツ②

一九二一年（大正十）に看護婦をこころざして東京にのぼった式部は、十代後半の多感な少女時代をこの都会でどのように過ごしたのだろうか。いまやそれを知る人はいない。消息をうかがい知るような書簡も残っていない。

式部が東京で過ごした大正後半、一九二〇年代は近代化が進むと同時に、女性の社会進出が目立った時期である。女子の進学率が右肩上がりになり、卒業生が職業婦人となって注目を集めるようになる。

彼女たちは、小学校や中学校の教員、電話交換手、タイピスト、女医、幼稚園保母、薬剤師、速記者など専門職についた。看護婦もその一つである。そういう職業婦人がブームのようになる。ブームといっても、職業婦人になれる女性はほんの少数で、九割の女性は女学校にも通えない貧しい家の娘であった。式部もまた九割のなかに入る貧しい山村の生まれだが、看護婦になるという夢を実現する。

看護婦という職業の社会的評価が高まるのは、第一次大戦の戦線で日赤の看護婦が活躍したことによる。「白衣の天使」と報道された看護婦にあこが

れて志願者が急増し、看護婦養成機関は三百を超えた。式部はそのなかに一つに学び、看護婦資格を得ることになる。

大正のなかごろに日本は近代化に向けて大きく動き出し、生活の改善がはかられた。とはいえ、衣食住にわたってモダンな生活を手に入れることができたのはほんの一握りの富裕層だけである。圧倒的多数の庶民は徳川時代から引き継いだ家屋に住んでいた。そんな江戸の残映が色濃い東京の風景を変えたのは、一九二三年（大正十二）に起こった関東大震災である。十万人が犠牲になり、多くの人が傷ついた。式部はおそらくこのとき、看護婦の卵として忙しく飛び回って力を尽くしたにちがいない。

杓として消息の知れない式部が姿をあらわすのは、震災から二年後の春である。彼女は看護婦となって、山形の病院ではたらいていた。いつ、どのようないきさつで東京からこの北国やってきたのかわからない。式部は勤務先の病院で、彼女にとって運命的な出会いを果たす。式部十九のときである。スキーで足を骨折した学生が、式部のつとめる病院に運ばれてきた。名は斌（タケシ）という。歳は式部より二つ上である。大学生生活最後の春を山形の雪山で過ごしていた。スキーは、登

山同様ヨーロッパから導入されたモダンなスポーツであった。近代青年にふさわしいスポーツとして学生のあいだに浸透しはじめていたが、ごく少数の裕福な家に生まれた学生に限られた。タケシも、スキーという近代スポーツに夢中になっていたようだ。

入院したタケシを式部はかいがいしく看護したらしい。式部にとってタケシは一患者にすぎず、他の患者と同じように見ていたようだが、タケシはひたむきな式部に心を奪われてしまう。

タケシの家は庄内藩酒井家に仕える藩士だった。父は厳格な教育者であり、豪放磊落で正義感のつよいところからドン・キホーテの異名をもつ。どっしりした重量感ある恰幅のよさ、丸刈りの短髪、眼光鋭く精悍な風貌、迫力充分のドン・キホーテだ。母は庄内藩の家老の娘で、嫁入り駕籠に乗って父のもとに嫁いできたという。

タケシの父は三十歳のとき新潟の名門中学の初代校長となり、七年間つとめた。その後秋田や新潟の中学の校長を経て、四十三歳のとき宮城県の中学校に迎えられる。その在職中に中学校で悲惨な事故が起こるのである。この悲劇は、校長であった父の心に生涯癒されることのない傷みと深い悲しみを刻みつけた。家族にもその影を落とした。タケシが中学生のときである。

冷えは万病のもと
健康は身体を温めることから
あなたは YOSA に座るだけ

YOSAPARK ののか <http://yosa-nonoka.com/>



YOSA (ヨサパーク) ののか

高槻市芥川町2丁目24-5
ジョイライフマンション203号室

TEL 072-684-2220

お気軽にお問い合わせ下さい

◇魚あれこれ◇

タコ(蛸) ①

周防春日丸

タコを魚だとは思っていたわけではないが、何故虫偏なのか？ 魚のように背骨はなく、血液も赤くない。血液中にはヘモシアンという緑色の色素が含まれているので、血液は青く見える。軟体動物で、体の仕組みから見れば貝類の仲間である。蛤(はまぐり)、蜆(しじみ)、蛸(あさり)も虫偏である。そこで貝の意を示す虫ということになるのであるうか？。他には鮪、章魚、鱧とも書くのである。

タコの語源は「タコは多股からきている」。また「蛸」は本来はクモのこととで、海に棲むクモという意味から「海蛸子(かいしょうし)」と表し、それが省略されて「蛸」一字でタコと呼ぶようになったのだという。それからタコは手の多いことから「手許多し」と言われ、これが転訛したものであるという説もある。いずれにせよ、その名には、タコの姿形、八本の手を持っていることが深く関わっているようである。

欧米ではグロテスクな容姿から、デビルフィッシュ(悪魔の魚)と呼ばれている。

タコは貝、エビ、カニ、魚などの餌が豊富にあり、水温もしのぎやすい海

域の岩場や砂地で活動する。

種類は百五十種類位と言われているが、食用になる主なものは、体長三メートル、体重三十キロにもなる水蛸、名前が産卵期に飯粒のような卵をもつことに由来する飯蛸、手長蛸があげられる。一般的にタコと言えばマダコを指す場合が多い。

タコは非常に頭のよい生き物である。色を見分けたり形を認識したりすることで、身を守るためには周囲の環境の変化に合わせて、体の色や体型を変えたり、危険を感じると黒い墨を吐き姿をくramsすのである。確かではないが意外と短命だと言われている。

タコの特徴は複数の吸盤がついた八本の触手である。一般的には足と呼ばれるが、腕と表記されることが多い。Octopusという名前は、ギリシャ語の「八本足」に由来する。

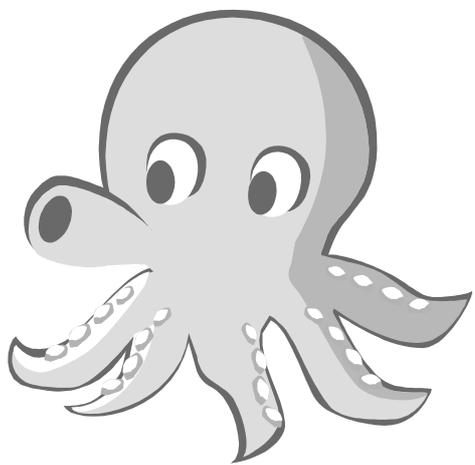
外敵に襲われたとき、捉えられた足を切り放して逃げることもあるが、足は再生する。短く生えてきているのを見ることがある。また急な水温の変化とか、何らかの環境の急変にストレスを受け、一種のヒステリーによって自分の足を食べることがあるが、このとき食べた足は再生しないというのである。

ところで、頭のように見える丸く大きな部分は、内臓の詰まった胴体であ

り、頭は足の付け根部分にある。つまり胴―頭―足となっている。頭足類と言われるイカも同じ仲間で、頭から足(腕)が生えていることになる。

タコは低カロリーでありながら、たんぱく質に富み、とりわけタウリンが豊富で亜鉛も多く含んでいる。夏場のものが特に美味とされ、関西では半夏(夏至から一日目)にタコを食べる習慣があるらしく、これはタウリンを補給して夏バテを防ぐためと言われている。この頃に田に植えた稲の苗がタコの足のように大地にしっかりと根付いて豊作になるようにとの願いから、タコを食べる所があると聞いたことがある。

我が島ではタコの岩場の穴や砂の中に潜む習性を利用した蛸壺漁が、今、真つ盛りなのである。



第2回芥川ハイキングの報告

六月七日、晴天に恵まれてハイキングを行いました。参加者は七名。九時に集合して、駅前からバスに乗り、上の口で下車して、摂津峡を下りました。新緑の渓谷を、地元生まれのHさん八十五歳のガイドで、昔の寒天作りや川遊び、オリンピックに出て最初にメダルを取った女性水泳選手が清水小学校のプール開きで初泳ぎしたことなどを聞きながら、桜公園まで歩いて弁当を食べて帰ってきました。七月・八月は暑いので九月からハイキングを再開しようと相談しました。

孫達に伝えたい自分んちの

おやつ味はないですか？

芥川商店街恒例の夜市に、昔なつかしい美味しかった、おやつのお店「芥川だより・グランマの店」を出店しようと考えています。どうか皆さんの知恵をお貸し下さい。はったいこ、べろべろなど、子どもの頃いつも食べていたおやつの様子を語りながら、忘れていた昔を思い出し、子ども達と楽しめればいいなあ。ハイキングの参加者にも手伝っていただきます。小さなふれあいを大事に育てていきたいと考えてます。皆さん来て下さいね！

富士登山

梅雨が明け、夏の陽ざしが照りつけるようになると、海や山が恋しくなります。私の女学校二年の頃です、私と姉は、以前からの念願であった富士登山を「今年こそ実現しましょう」と思い立ったので、従妹の愛ちゃんも誘うことにしました。私たちだけでは不安なので、付き添ってくれる男性を探したところ、隣の幸ちゃんと磯部さん、それから金ちゃん先生が快く引き受けてくれました。

山開きの七月二十一日、朝九時に家を出て、昼頃には、浅間神社に参詣しました。富士の山霊を鎮めるためのお宮さんです。山梨側の登山口、吉田口から登りはじめます。

最近では五合目までバスで登ってしましますが、戦前はそんな便利な乗り物も道路もありません。一合目から歩かねばなりません。足元を照らす明かりは小田原提灯です。まだ懐中電灯なんてない時代でした。足にワラジを履き、手には「六根清浄」と焼き印された金剛杖。いまから見るとちよつと奇妙な格好ですが、当時はそれが当たり前でした。

道案内を兼ねた強力さんをたのみました。持ち物はセーター一枚くらい。はじめは楽しい山歩きも、次第に疲れが出て

きて、歩くペースが落ちてきました。疲れたからといって、引き返すわけにもいかず、励み励まされ、歩きつづけ、ようやく五合目の山小屋にたどり着いたのは夜の一時頃、みなへとへとに疲れはてていました。冷えた夕食を戴くとすぐにバタバタと倒れるように冷たい布団に横になり、いつのまにか、みな深い眠りについていました。

翌朝は四時に起こされました。早く発たないとご来迎を拜めません。すばやく仕度をして、出発します。「このあたりは木が生えているからいいけれども、もうすぐ石ばかりになるから、気をつけなきゃいけないよ」と強力さんが注意してくれました。まわりの人たちはみな脇目も触れずどんどん登ってゆきます。私は、置いていかれないように一所懸命に頑張

ってついていきました。次第に空がしらみかけてきました。ハッと気がついたときはすでに遅く、お日様が顔を出しているのです。ああ、登るのになんか懸命になりすぎて、お日様がお顔を出す瞬間を見落としてしまったと残念でなりません。した。

何気なくあたり見回すと、道の脇に七合目の標識があり、そこから脇にそれたところに休憩所がありました。ここでゆっくりしていたらすぐ時間が経ってしま

ないようにしなければと思って登りつづきました。

そのうちに姉が苦しいといい出したのです。私は心配して、「強力さん、姉が苦しがつています」といったら、「もうすぐ八合目だから、その小屋で酸素吸入をさせてもらいなさい。酸素を吸えば大丈夫。お姉さんはそこで休憩してもらって、あとの人は頂上へ登りましょう」という。

姉は、酸素稀薄の状況に身体が対応できずに呼吸困難におちいつていたので。他の人は、息苦しくありませんでしたので、頂上に向かいました。

念願の頂上によりやくたどり着いたのは十二時でした。さっそく私は幸ちゃんや金ちゃんたちと一緒にお鉢巡りをしました。遠くの景色をゆっくり楽しみなが

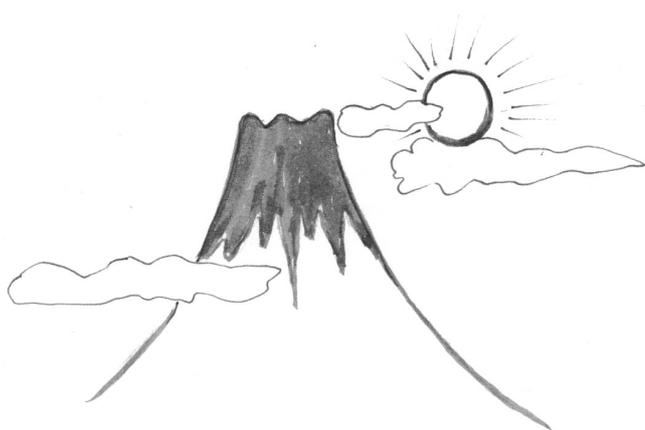
ら、いま日本でいちばん高い場所に立っているんだという妙味を満喫しました。頂上に休憩所があつて、コップ一杯の水が十銭と書いてある。ちょうど喉が渇いていて、水が飲みたいと思つていたところだったので、一杯いただきました。強力さんは「これは富士山の万年雪を溶かした水で、一杯飲めば十年長生きするよ。よく頂上まで登れたね」と褒めてく

ださいました。姉がいつしよに頂上まで来られなかったことはほんとうに残念でしたが、私は呼吸困難にもならず無事に登れたことを、頂上のお宮さんに手を合わせ、心から感謝しました。

頂上で十五分ほど過ごし、「そろそろ八合目へ下りましょう」という強力さんの指示に従つて、姉の待つ八合目の小屋へ降りました。姉は酸素吸入をして、呼吸困難な状態からは脱していました。思うように呼吸のできないときはとても苦し

かったそうです。すっかり落ち着いている姉を見て、私は安心しました。強力さんは「さあ、じゅうぶん休みを取ったから、こんどは下りですよ」と道の横手の下り口を指さして、いきました。「ここで私は皆さんとお別れです。ここからの下りは油断してはいけません。命の危険もありますから、みなさん、くれぐれも気をつけてください。」

(次ページへつづく)



(富士登山)の続き)

二人一組になって、絶対に離れないように腕組みして降りてください。金剛杖をしっかり持って、転ばないように立っているだけでいいですからね。

真つ直ぐに下って着いたところが六合目です。だいたい一時間で降りられます。幸運を祈っています」といいながら鉢巻をとって手を振る八合目の強力さんに「さよなら」といった瞬間、私たちは下りはじめました。

私は幸ちゃんの力強い腕にしがみついて、急傾斜の坂をすべるように下へ下へと降りていきます。流れる砂に乗ってあれよあれよという間に六合目に着いてしまいました。そこから下へはもうすべるようには動きません。「あらもう動かない」といったところはほとんど平らでした。なるほど砂滑りとはこのことかと、楽しい体験をしました。ですが、強力さんが注意したとおり、この砂滑りはひじょうに危険で、死亡事故もあったのです。いまではこの砂滑りは禁止されているそうです。でも、私は面白く愉快な経験をさせてもらったと思っています。

一合目から歩いて頂上に達し、一杯十銭の万年雪の水をいただいて、砂滑りで下る、いまではできない経験でしょう。懐かしい思い出です。

投稿「川柳」

真本嘉代子

○生きているだからいろんな事もあ
る

○負けた振りすることも又楽しかり

○クラリネット



読者からのたより

☆「妻への侘び状」良かったです。私の暮らしは、湯の中の苦勞で、作家・星野哲郎先生は涙なしには語れません。あなたの文章は、本当に私の気持ちをハイにしてください。胸がぶつとあがります。芥川だより楽しいです。感謝。

Iさん

☆「芥川だより」昨日受け取り、楽しく拝見させていただきました。イラストも素敵で、なんだか、ほのぼのときます。24号目指して頑張ってくださいませ。ありがとうございました。

Mさん

☆「芥川だより」うれしく頂きました。皆様とても感心しています。“楽しいきみちゃん”笑いながらお読みになる方が多いと思います。うまく書けてると思います。

Sさん

☆「芥川だより」を毎月拝見させていただいていますが、今回は特に「江戸っ子エンちゃんの少女期」④ 雪降る朝―昭和十一年二月二十六日を興味深く読ませていただきました。私は昭和十一年二月二十八日の生まれだからです。私の生まれた年にこんな大事件があったのだということは始めて知りました。

Mさん

☆ はじめてお便りします。私は幼少の頃より芥川の街に住んでいた者です。今は一人ぼっちで高槻の片隅で宿しております。時々芥川地区が懐かしくなり散歩に出かけます。芥川だより発行されて十一号、No. 十一号まで集まり大切に保管しております。只一号が無いのが残念です、芥川だよりを楽しませていただきます！頑張ってください！

Kさん

(一号在庫ありますから、声をかけて下さいね)

商店街美味いもん探し

私は、すし屋へ行ったら、まず鉄火巻きを頼む。鉄火巻きで大事なのが海苔である。なかなか美味い海苔に出会えない。

ところが、灯台元暮らしとはよく言ったもので、お隣のえびすやさんに先日もらった海苔が実に美味かった。食卓に置いてあったのがすぐになくなった。いつもは食べない娘までもが美味いといって食べてしまった。仕方がないので、もらい物の海苔を出して食べるが、味が違う。ゼンゼンちがう！こうなれば、同じのを買って食べるしか方法がないので買う事にした。有明産・味付け卓上のり。全方十枚入り。六百八十三円なり。(嘉)

編集後記

半分の十二号までできました。ありがとうございます。毎月千部印刷しますが、前回から五十部増刷しています。今回は、一周年の記念号ですから、十二ページにしました。初めて高校生からの投稿があり、内容も素晴しかったので一挙に掲載しました。

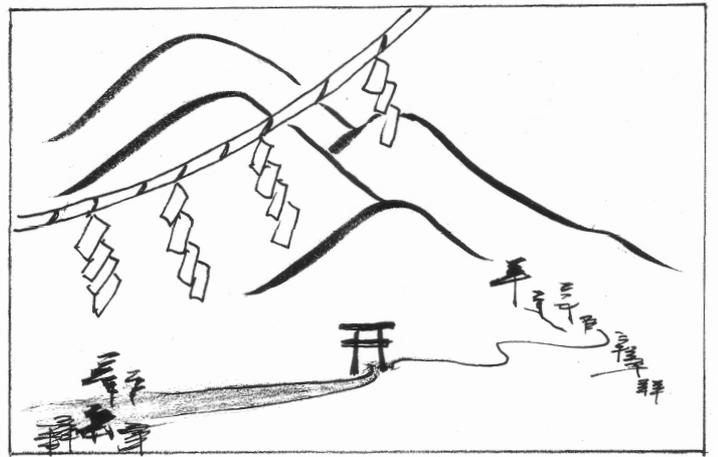
読者の皆さん！ あなたの思いを書いて、お寄せ下さい。千人の人が見て読んで、共感してくれるでしょう。

科野山猿

五号で、山には神々が住んでいるというチベット人の山との関係性についてお話ししましたが、山にたいする態度はそれぞれの国というか、文化圏によって異なります。

日本では、山は死者の霊がおもむくところであったり、神々が降臨するところであり、神聖な場所でした。また、七世紀には仏教が浸透する中で、山岳修験者が出現します。山に登ることを信仰の中心におくんですね。山の霊気をもたらしたり、新たに再生するために山に入っていったわけです。

日本の山は独特で、ヒマラヤのような高山はありませんし、ヨーロッパ・アルプスのような岩と雪の山は中部山岳地帯の一部に限られます。ほとんどが森に覆われた、人々の生活に近いところにある山です。そういう山にいます神を、社や祠をつくって祀るんです。江戸時代の太平の世になると、霊山を遙拝したり、さらに登拝するようになります。チベットの山も神々が住む聖なるところですが、日本のように山の神を祀ったり、遙拝とか登拝をするという習慣はありません。



ヨーロッパでは、十七、八世紀までは悪魔のすみかでした。山の風景を語るとき、怪物のようなものとか、気味の悪いもの、見るも恐ろしいものというのが決まり文句だった。山は地上の醜いごぶか、火ぶくれのように思っていたわけですね。自然界で山がもつとも醜いものだったのです。

ところが、十九世紀になると、山にたいする価値観が逆転します。山は美しいと認識されるようになるんです。それは、山の美しさを謳ったワーズワースやバイロン、ゲーテ、ハイネといった文人たちの影響があります。決定的な影響を与えたのはジョン・ラスキンです。彼らに啓発された人々が山へ

の関心を深めていったんです。このころからアルプスの山々が登られはじめるのです。

そして、十九世紀の半ばにアルプスに登場した英国人によって近代登山が開花する。登山がスポーツとして組織されるのです。ちやうど「エベレスト」が最高峰として発見されたころですね。英国にアルパイン・クラブが設立されるのは一八五七年です。

十八世紀後半にいくつかの先駆的な登山はありました。パツカールとバルマがアルプス最高峰モンブランに登った登山（一七八六年）もその一つです。この時代のパオニアの多くは僧侶です。代表的な人はプラスチック・スペシアというスイスの聖職者で、「真の登山家に値する最初の人」と称えられています。

近代登山のはじまりには山岳美の発見とその普及が背景にあります。やはり山に入るためにはそこに住む神や悪魔を追い払う必要があります。これは桑原武夫さんの指摘です。山にまとわりついた神秘性をはぎとって、山がたんなる岩と氷のかたまり、すなわち物質になる必要があった。そのために重要な役割を果たしたのがプロテスタントイイズムだという。キリスト教から神秘的要素を消し去ったからです。チベット人が「エベレスト」すなわちチョモカンガルに登るためには、この山に住むツェリンチェーガという女神を追い出さ

なければならぬわけです。

それと併行してアルピニズムの指導精神となったのが近代自然科学だと桑原さんはいいます。たしかにアルプスに入った先達は科学者です。未知を探究し、発見によって得られたデータを蓄積して、また新たな未踏の地に足を踏み入れていく、そういう科学精神は近代登山の精神とあい通じるというわけです。

十九世紀に始まる近代登山の最初の時代は黄金時代と呼ばれます。アルプスの秘密が解き明かされ、主だった未踏の高峰に登られた探検登山の時代です。黄金時代に終焉を告げる登山が、一八六五年のウインパーによるマッターホルン登頂です。ちやうど「エベレスト」の標高が八八四〇メートルと算定された年です。

次の時代は銀の時代といって、バリエーション・ルートが開拓された。冬山登山や単独登山、ガイドレス登山も行われるようになります。アルプスの主役は次第に、英国人からドイツやオーストラリアの大陸の登山家に移っていきます。いっぽう英国人は、カフカズやヒマラヤ、アンデスへと活動範囲を海外に広げていく。十九世紀のおわりごろになって、ヒマラヤの高峰を目ざして登山が試みられるようになるのです。